

# わたしの 効果倍増! 教材活用術

## テストの指導でやる気と成績アップを ねらいませんか？

福岡市立別府小学校教諭 鈴木三保

### 1. テストの受け方も指導が必要！

子どもたちがテストを受ける要領を身につけているかどうかで結果は随分変わってきます。その子の知識や技能の習得を問うのがテストですが、要領が悪いと実力を発揮することができません。こちらが調べたい力を正しくはかるためにも、子どもたちにテストを受ける要領を指導する必要があります。

最初に指導すべきことは、「わかる問題から解き、わからない問題や時間のかかる問題は後回しにする」ことです。テレビで見たのですが、わからない問題にひっかかると思考力が低下することが脳科学の分野でわかってきたそうです。しかし、子どもたちの多くは、順序よく答えを埋めたがり、指導しないと飛ばして先に進むということができません。多くのテストは最初の問題が易しく、後ろはだんだん難しくなるものですが、後ろの方が解きやすい子どももいます。また、裏面の問題が基礎問題になっているテストもあります。ですから、次のことは、ぜひ身につけさせた

いものです。

- ① 名前を書くついでにテスト全体に目を通す。(時間配分を考える)
- ② 解きやすい問題から取り組む。(解く順番を考える)
- ③ 解ける問題が全部終わったら、解けない問題でも何かしら答えを書く。
- ④ 問題に応じた答えになっているか見直しをする。

また、「5秒考えてわからなかったら、次の問題に進みなさい」という指導もします。

算数のテストでは、「最初に式を立てる問題の式を全部書きなさい。計算しなくても式さえ合っていれば5点ずつもらえます。式を書き終わったら、解ける問題からやりなさい」と指導します。つまり、「365ページある本を毎日15ページずつ読むことにしました。何日で読み終わりますか」という問題は、 $365 \div 15$ と書けば5点もらえるのです。これで少しでも点数がとれるようになれば、文章題への苦

手意識が軽減されます。点数がとれることは、やる気を高める源になります。

### 2. ボーナス点をつけてみませんか？

人の体には大きく分けて2種類の筋肉があるそうです。短距離走のように瞬発力を要する時に使う筋肉と、持久走のように長い時間運動を続ける時に使う筋肉です。思考力も同じではないでしょうか？ パツと答えなければならぬ時と、じっくり考えなければならぬ時があります。じっくり考えなければならぬ時には考え続ける持久力が必要ですが、5〜6分考えたらもうギブアップする人、3分と続かない人もいます。走り続ける持久力は走る練習をすることで伸ばせます。同様に、「考え続ける持久力」を伸ばす練習も必要です。

問題を何分何秒でできるか試す小テストは、反射的に答える力を高めるのに役立つでしょう。覚えておくべきことが身についたかどうかを試すのに使います。7×8の答えを出すのに2分も3分もかかっていたのでは「身についた」とはいえません。7×8=56と即答できるくらいに鍛える必要があります。このようなトレーニングは、短時間でできることもあり、日頃からよく取り組んでいるはず。その一方、20分も30分も1人で考え続ける機会はどれくらいとれているでしょうか？ 45分の授業中で、見直しをもち、自力解決し、考えを交流し、まとめて振り返ると

日々の授業で使う教材や教具。

隣のクラスや隣の学校のあの先生は、一体どんな使い方をしているのでしょうか？

このコーナーでは、気になる教材活用術を紹介します。

いう流れの中では、ひとりですっきり考える時間をそう長くとれません。ですから、テストの時間をじっくり考える練習に使いたいです。そこで、見直しをしてもまだ余る時間を活用してみませんか？

私のやり方は、「時間が余った人は、解くのに使った公式や考えの説明を、テストの余白に書きこんでください。その内容がよければ、ボーナス点をつけます」というものです。算数だったら、公式や途中計算、数直線図、図形などを書かせます。国語だったら、上の本文や下の問題文にサイドラインなどを引き、どう考えて答えたのかがわかるようになってきたら+2点、定規で線を引くなど見やすくしていれば同じ内容でも+3点、というつけ方をします。漢字なら書き順で+3点、とめはね・はらいの区別を書いていたなら1文字につき+3点、意味を選ぶ問題で漢字の意味などを書いていたら+2点、とします。社会だったら、資料のどこから答えがわかったかを線でつないだり、読み取りポイントを丸で囲んだりしていたら+2点、選択肢の解説に+3点。理科も、テストに載っている資料から考える問題はそのポイントを、実験に関する問題であればその注意点を書いていれば加えます。

何点加えるかは、内容や書き方によって増減します。どんなにたくさん書いていても、問題を解くのに関係ない知識の羅列やズレたものには点数をつけません。ただし、間違っ

た内容を書いているでも減点はしません（本当に理解できているわけではないということも伝わりませんが）。

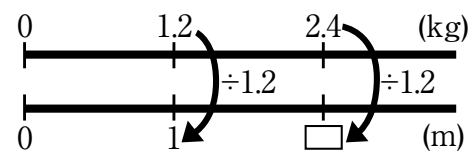
ボーナス点をつけると、+3点がほしくて書いた公式から、正しい式がわかることがあります。国語のテストでラインを引く時に、答え方が違うことに気づくことがあります。ただ見直しをするよりも効果があるケースが多いのです。また、ボーナス点なしのテストよりも点数が高くなるので「テストの点数が上がった！」とやる気が起こる子どもが多いようです。テストはあらかじめ満点が決まっているため「もうできた」と思った時点で考えるのをやめてしまいます。しかし、ボーナス点は上限がありませんので、頑張ればその点数が高くなるのが期待できます。1問2問ミスしても、ボーナス点との合計は100点を超えることがあるので、自信につながる子が増えます。



▲子どもにとっては137点のテスト

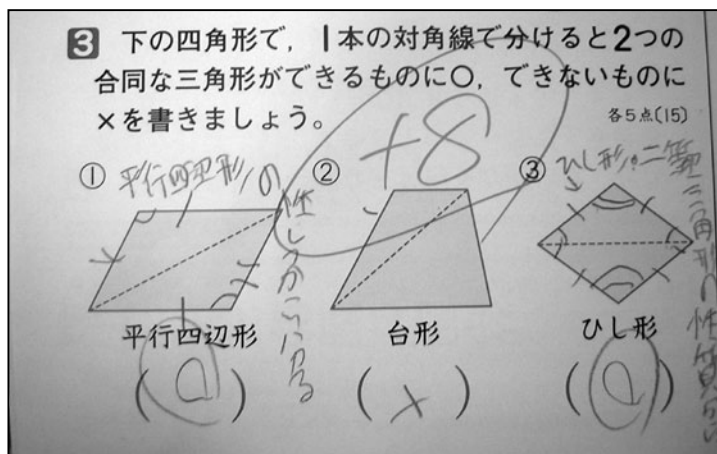
算数では、数直線図がかけるようになってほしいと考えています。文章題が苦手な子どもも解けるようになるからです。しかし、苦手な子はなかなかチャレンジしてくれません。

そこで、数直線図がちゃんとかけていたら+8点をつけます。下の数直線図なら、0と数直線2本をかいでもりをつけたことで+1点、単位の選び方で+2点、各めもりに数と□を書いたら4つで+2点、2本の矢印で+1点、演算の決定で+2点、という内訳です。「8点稼げるなら、数直線図がかけるようになりたい」と思ってくれる子が少しずつでも出てくれば良いのです。最初は「テストに印刷されている数直線図に矢印や演算記号を書き加えてみたら、ボーナス点がついた」ということから「数直線図はボーナス点を稼げる！」となつて、「かけるようになろう」とつながります。

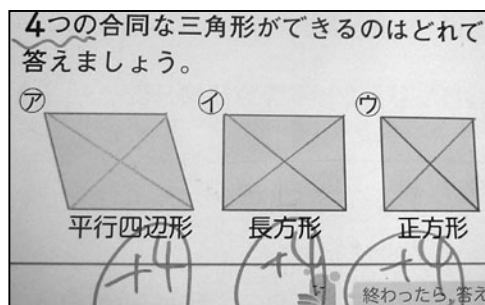
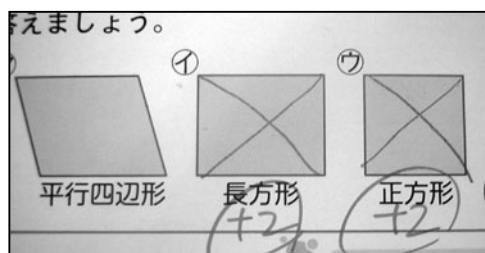


もちろん、「数直線図がかけるようになると文章題で有利ですよ」という励ましの声かけも効果的です。

ボーナス点に取り組み始めてもすぐにクラス全員に効果が出ることはありません。最初は数人であっても、その子たちが喜ぶ姿を見ているうちに「やってみようかな」と思う子が徐々に増えていきます。あまりにも効果が



▲○にした理由ひとつにつき4点、2つで+8点。



▲同じ内容でも定規を使っていたら点数を高くする。

出てくると、「ボーナス点を稼ぐのに夢中になって、テストの問題を後回しにしてはいけません。ボーナス点稼ぎは、わかる問題の答えを全部書き終わってから」と言わなければならぬほどです。

思考過程を表現する意欲の高まりが授業中にも波及してきます。ドリルノートの書き方もよくなってきました。ボーナス点をつけるのは、普通に採点するよりも手間がかかりますが、子どもに力がつくことを考えると、頑張りがあります。なお、ボーナス点は、その内容に応じて各観点で評価をする際の参考資料のひとつになっています。

### 3. 自己採点もお勧めです!

私は新任の時、「テストが終わったらすぐ自己採点をさせる。そうすれば子どもたちは自分がどこをなぜ間違えたかがわかる。教師が採点して返却すると関心は点数にいくけれど、自己採点だと『この答えで合っているかどうか。間違っているならなぜ間違っているか』に意識が向く」と教わりました。そこで、よほど時間が足りない時と漢字50問テストの時以外は自己採点させています。

子どもがテストをしている間にカーテンを閉めて黒板に答えを書き、テストが終わったら鉛筆と消しゴムを机にしまわせてからカーテンを開け、赤鉛筆で丸をつけさせます。空欄や間違っていたところは、その場で書き写させます。

最初は、書き写すだけなのに正しく書けない子、間違っているのに丸をつけている子が多いです。回収後は採点や書き直しが正しくできているかチェックしてから点数を書き込んで返却します。

採点ミスがあったら、名簿の点数に印をつけておきます。その印が何度もつく子どもは他のミスも多い傾向があるので、ミスを減らすための指導をします。その結果、多くの子どもが採点ミスだけでなく他のミスも減らすことができました。

保護者には「子どもに渡す採点は厳しくしますが、二重に記録しています。普通の採点基準なら正解にできるものは、成績をつける際には減点していません。厳しくつける理由は『今回は丸をあげるけど、次からはちゃんと書いてね』と言っても『前に丸がもらえたから』と思うのか、意識してくれないからです』と、懇談会で説明しておきます。

テストのやり方次第で、子どもの力とやる気が伸びてきます。クラスに合ったやり方を工夫するのは楽しいですよ。